

冷戦とその終結

今回学ぶこと

第二次世界大戦後、アメリカ合衆国を中心とする資本主義陣営（西側）と、ソ連を中心とする社会主義陣営（東側）とが、世界的規模で緊張状態を生み出した。この対立構造は「冷たい戦争（冷戦）」と呼ばれ、1989年に米ソ両国首脳が冷戦終結を宣言するまで続いた。冷戦はどのように生じ、どのような対立が繰り広げられたのだろうか。冷戦の歴史を振り返りながら、冷戦後の世界についても考えてみよう。

調べておこう・覚えておこう

- 西側陣営と東側陣営との対立関係を、地図の上で確認しよう。
- 冷戦はどのように展開され、どのような状況の中で終結に至ったのか、調べてみよう。
- 冷戦後の世界はどのような特徴を示しているのか、身近な事例をもとに考えてみよう。

冷戦体制の形成と展開

東西対立はまずヨーロッパで形成された。1947年のマーシャル・プランの発表によって、アメリカ合衆国は、ソ連の影響力が東欧に浸透することを防ごうとした。アメリカを中心とする西側陣営は1949年に北大西洋条約機構（NATO）を結成し、軍事的にも結束した。こうした動きに対抗して、ソ連を中心とする東側ではコミンフォルムが組織された。さらにアメリカによる封じ込め政策をうけて、ソ連は東欧諸国との軍事的・経済的結合を強化した。米ソ両国は軍拡競争を展開し、互いに大量の核兵器を保有するようになった。

戦後ドイツは連合国に分割占領されていたが、1949年に西側占領地域でドイツ連邦共和国（西ドイツ）が誕生すると、ソ連占領地域ではドイツ民主共和国（東ドイツ）の成立が宣言された。東ドイツの中にあつたベルリン市も東西に分断され、西ベルリンは西側陣営の飛び地となつてしまった。東ドイツは1961年に西ベルリンを包囲する壁を建設し、ベルリンの壁は東西冷戦の象徴となつた。

冷戦の終結とソ連の崩壊

冷戦は世界規模で影響を及ぼした。米ソ両国に分割占領された朝鮮半島では、南に大韓民国、北には朝鮮民主主義人民共和国が成立して対立した。1950年には朝鮮戦争が勃発し、これは東西両陣営の代理戦争という性格をおびた。さらに1962年にはソ連のミサイル基地建設をめぐってキューバ危機が発生し、米ソ両国は核戦争の危機に直面した。この危機を回避した米ソ両国は、核兵器の抑止機能に依存しつつも、軍事力の均衡をとりながら段階的に軍備を縮小する方向に向かった。しかし1979年にソ連がアフガニスタンに侵攻すると、西側諸国は強く反発し、再び東西緊張が高まった。

東西両陣営の対立は、双方に大きな経済的負担を強いることになった。とくに産業構造の転換に立ち遅れたソ連では、経済は深刻なまでに停滞した。1985年にソ連共産党書記長に就任したゴルバチョフは、体制の根本的改革を目指し、その一環として対外関係の改善を進めた。1989年の東欧革命とベルリンの壁開放ののち、アメリカ合衆国のブッシュ大統領とゴルバチョフは同年末、マルタ会談で冷戦の終結を宣言した。一方、ペレストロイカの進展と冷戦の終結はソ連国家の統合力を急速に喪失させ、ソ連は1991年末に解体した。

加速するグローバル化

かつてソ連を構成した諸国や東ヨーロッパの旧社会主義諸国は、資本主義へと体制を転換し、人々の生活は大きく変化した。また、インターネットの急速な発展によって情報が国境を越えて共有されるようになり、資金や技術、労働力の移動が地球規模に展開されるグローバル化が進んだ。社会主義体制を維持する中国やベトナムも、開放政策を採用して経済成長を遂げた。世界経済においては市場原理のもとで自由競争が追求され、1995年には世界貿易機関（WTO）が発足して自由貿易化が促進された。他方、市場経済のグローバル化によって、一国の経済危機が世界規模で影響を及ぼす事態も生じている。

グローバル化の進展は、世界経済を活性化させた一方で、貧困問題や債務問題を抱える国々が直面する課題をさらに深刻化させる側面ももっていた。貧困問題の深刻化や経済的格差の拡大は、新たな地域紛争や国際テロ組織の影響力拡大の原因にもなっている。

